

図版1 七編下原裏表紙（色刷）、八編上原表紙（色刷）

翻刻『雪梅芳譚犬の草紙』（十五）

肥留川 嘉子
隅田 三鈴

凡例

一、「翻刻『雪梅芳譚犬の草紙』（十四）」（『京都光華女子大学 研究紀要』第五十二号、平成二十六年十二月）の後を承けて、京都光華女子大学図書館蔵『雪梅芳譚犬の草紙』の「八編上」を、図版を掲げつつ翻刻する。合巻『雪梅芳譚犬の草紙』については、「初編上」の翻刻を掲載した『光華日本文学』第十二号の「凡例」を参照いただきたい。

一、翻刻の方針のみあらためて掲出する。

1、図版は各丁見開きを一面とし、丁付けにより「一ウ、二オ」のように示す。

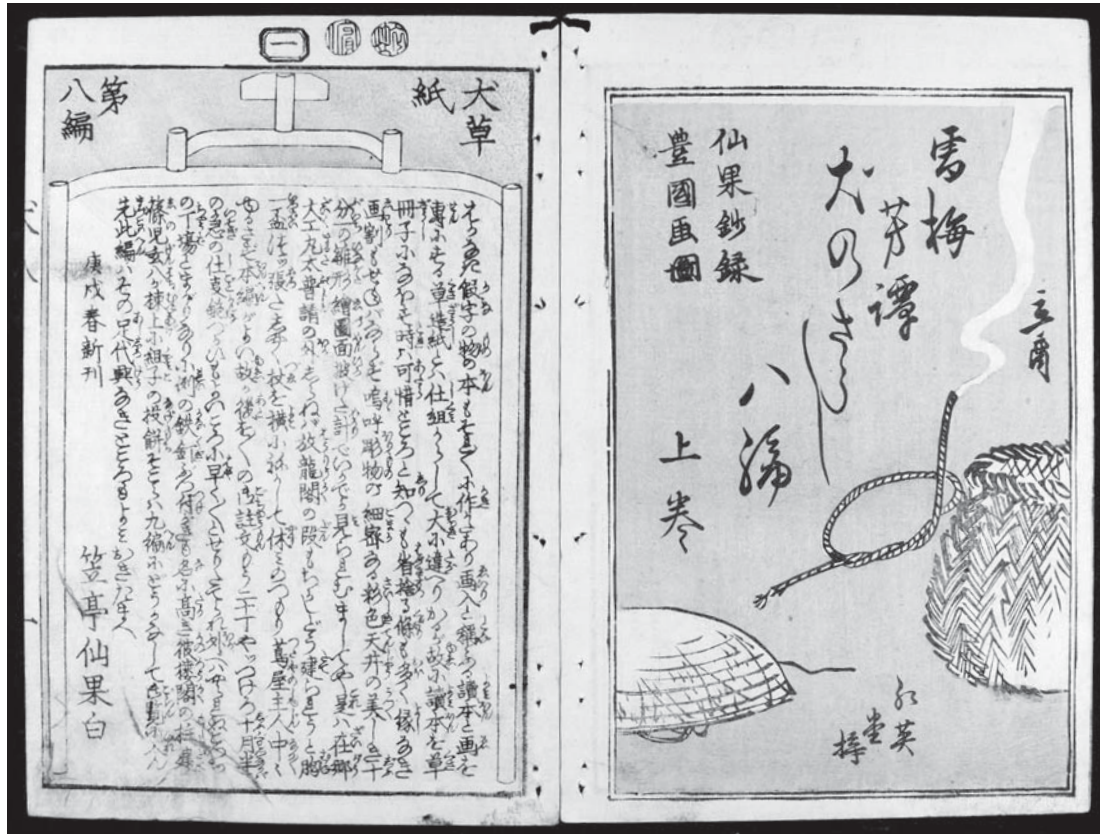
2、本文翻刻は、やはり「一ウ―二オ」のように冠し、改行位置は／で示し、丁移りは「」で示すが、書入れについては丁付けにこだわらない。

3、一面が二枚の絵組から成る場合、翻刻の方のみ半丁ごとに分離する。

4、原文はできる限りそのままとするが、漢字仮名とも、異体字、略体字は現行のものに改めた。

5、読みやすくするため、句読点を補い（ただし、序文の句点は原文のままとし、その旨を断わった）、会話文については「」を、会話中の会話文には「」を補った。原文にある「は」に改めた（原文の「あるいは」は、「と」した）。さらに仮名を適宜、漢字に置き換え、その場合もとの仮名をルビに移した。

6、原文の振り仮名は、右と区別するために（ ）に入れた。ただし、袋表紙および序文等、一部原文のままの振り仮名に（ ）をつけなかったところがある。その場合は、その旨を断わった。



図版 2 原表紙見返し (色刷)、一才

7、書入れは本文のあとへ一段下げて、文意の通り易い順に記した。
 8、本文中にある読み進めるための合印については、すべて●で統一した。

9、「初編下」に至って出てきた、本文中の○(段落を改める意識で使用されている模様)は、その位置にそのまま翻刻した。

一、末尾に、前号までに倣って、「八編上」に出るもののみながら、登場人物名(まれに地名等もある)と、元の読本『南総里見八犬伝』の相当する名称との対照表を付した。

〔原表紙〕

笠亭仙果鈔録

八編上

葛吉板

〔原表紙見返し〕

雪梅／芳譚

犬のさし／し

八編／上巻

仙果鈔録／豊國画圖

立齋

紅英／堂／梓



図版3 一ウ、二オ

〔二オ〕

(振り仮名は原文のまま)

一

犬草／紙
第／八編

はかなき假字の物の本もそれ／＼に作かたあり。画入と稱ふる讀本と画を／＼専にする草造紙とは、仕組からして大に違へり。かるが故に、讀本を草／＼冊子になほす時は、可惜ところと知つ、も省捨る條も多く、縁なき／＼画割もせねばならず、嗚呼彫物の細密なる彩色天井の美しき十／＼分の雛形繪圖面、披げた計でいかでか見られむ。ましてや是在郷／＼大工、丸大普請の外しらねば放龍閣の段もちかし、どう建られうと胸／＼一盃つ張たしやく杖を横にねかして休みのつもり。葛屋主人中々／＼ゆるさず、本編がよい故か、後を／＼の御註文。もう二十丁やツつける。十月半／＼の急の仕事、鉞つかひもよいころに、早く／＼とせりたてられ、外へはやらぬこつち／＼の丁場と、まがりなりに例の鉄釘、ぶつ付がきも名に高き彼樓閣の柱建、篠兎玄八が棟上に組子の投餅、そこらは九編にどうかなして御覽に入ん。／＼先此編はその足代、興なきところもよみおきたまへ。

庚戌春新刊

笠亭仙果白

〔二ウー二オ〕

(振り仮名は原文のまま)

寂寞道人肩柳
原は何国の人民なるを／＼しらず。その修法薪を積／＼て烈火を踏むに、自若と／＼して手足焼爛る、ことなし。／＼これによりて人の吉凶悔／＼吝を占ひ、又病厄を／＼祈禱するに應驗ありといふ。

〔二ウー三オ〕

○絵は七編の末に／＼出で、彼処に残れる／＼物語。瓶ざ、が／＼言葉より記す。／＼『鱧次郎さん、そんなら／＼首尾良うやつた上で／＼破魔兎がうんと言はぬ／＼



図版4 二ウ、三オ

時は骨折り損と／言ふのかへ。お前は存／外野暮な／人。破魔児／も篠兎に
 ／義理／立て、／つれない／顔をした／のか知らず、／彼奴が他国へ／行く
 上は、誰に遠慮で素気／なくせう。女誑しの当／世男、頭を振るも／うな
 ／づくも、／お前／の胸と／仕方次／第。親に／聞くのは／ちと馬鹿念。
 男と逃げる娘もあり。」ましてや親から許す婿、嫌とも／言ふまい。言う
 たとて其処は梶の取りやう次第。／まさかさうとは言はれもせまいが、親の
 目からさへ／たゞとは見えぬ二人が仲に、改めて念を／押すのはお前でもな
 い」トほと／背な／打ち叩けば、鱧次郎は鬢搔き／、／『仰ればそ
 んなもの。ともかくも仰る／通り命に代へてもやりつけませう』ト聞いて
 ／瓶さ、にこくと、猶何事かひそ／囁き、時を移して帰り行き、夫に
 この由詳／しく語れば非義六／も心を／安んじ、それ／より篠兎を／招き
 寄せ、／改めて／言ひけるは「其方と娘の婚禮／一条、村からも催促
 を受けたこともあつたれど、／去年は思はぬ戦／騒ぎ、其処所でもなかつ
 たが、最早今年は世界も／穏やか。破魔児とも杯／させ家督を譲る時節
 も／来れど、聞けば許我の成／氏様、千葉より許我の／熊浦へ帰らせられし
 と／聞、及ぶ。●上へ●下より其方の為には御主筋。しかれども鎌倉の
 管領殿と御仲悪しく鎌倉を追ひ出だされ、許我の／城にも堪りかね千葉
 へ身を寄せ給ひし故、此方の殿様／大石殿は鎌倉方のことなれば、成氏様の
 こと、言うては善／悪沙汰の出来ぬところが、この度御和睦なされたれば
 今この時に大須賀の家を興さで何時を待たん。／その立身の種といふは、
 村雨丸の御／太刀なり。あの一腰を許我へ持ち行き／先祖の忠義を申し立
 て、献／上をするならば召し出だされるは／定のもの。彼方で／家を立て
 るとならば／すぐに破魔児を／送つてやらう。またさも／なくて帰らうな
 ら、その／ま、家督も役目も譲り、我等は／隠居の願ひを出さう。大石殿も
 元／の通り村長ではおかしやるまい。／陣代ぐらゐはきつと請け合ひ。俺
 も／其方の光に連れて死に花を／咲かせよう」ト言へば、瓶さ、口差し出
 だし／『実の子とは無い我／、力と／恃むは其方ばかり。ため悪かれ
 とは如何して思はう。土用／半ばの旅の空、大儀であ／らうが許我は近
 し。善は急げぢや。／一日も早う行くのが良ささうな』ト／親切らしく勸
 められ、篠兎は予て／つきへ



図版5 三ウ、四オ

ゆのたき／水のたき
王子みち

〔三ウ—四オ〕

つゞき 虬六が結納を承け込みし由を／岳藏密かに見て「斯うく」と告げたりければ、「陣代と縁を／結び、我を邪魔がり追ひ／出だす巧みなり」と早く悟／れど少しも色には顕さず、／『今に始めぬ御親切、有難うござり／ます。村雨丸は春王、安王二方の／御形見。その弟君の許我殿へ参らせよ／とは父にも遺言。仰せの通り良き折／から、私よりも申し出だしお指図／受けんと存せしところ、お二人にもお心／付かれ、斯く仰るも時節到来。寸善／尺魔は世の慣らひ、明朝発足／致さん』ト逸れば、夫婦は喜び／ながら顔見合はせて打ち領き／『明日とは余り忙しない。ちつ／とは用意もせにやならぬ。日柄が／良くば明後日頃、旦那、さうでは／ござりませんか』／『ヲ、一日は／支度にもか、らねば出掛けられ／まい。供には／湍すけか岳／藏を、ふた／りに一人は／付けてやらう。／さてもく／目出度いく』／『何か俄／に忙しくなつてきた。／彼方へ／持つて行く／物を今夜／から纏めて／おきやれ』／『畏まつて／ござります』ト篠兎はお／のが部屋に／帰れば、はや／日も暮れて／薄暗がり。庭の植木／に水注ぐ／岳藏を／近づけて／篠兎はこの由／物語れば／『いつそそれも／ようござらうが、／愛しいは破魔兎／殿。あれほど／思うてござる／ものを』ト吐息を／吐けば、篠兎も思／はず浮かむ涙を／そつと隠し、

●『かはいさうとは／思へども、さらば／とて連れても行か／れず。嗚呼、これも／思ひ過ぐし、／移りやすいはをん／の心。この篠兎さへ／居らずならば自然と／親の心にした／がひ、思ひの外／静かに事の／●』

●済まは互ひの身の仕合／はせ。ともかく身を立て家を／興す大望のある男の／身で、女の為に生／涯を過たは不覚の／至り。たゞ打ち捨て、行く／べし』ト聞いて岳藏／打ち領き、密かにふた／りは／立ち／別／れぬ。

○篠兎が／俄／に／旅／立つ由／聞いて破魔兎が憂さ辛さ。／脚絆よ足袋よと旅／支度、昔の小笠に縫ひ／付くる、標の紅絹のくれ／なみに、涙の色も／変はり縞、百筋千筋／思ひても、付いて行かれぬ旅の／空。我



図版6 四ウ、五オ

が身は此処、に何時までか、／引き残さるゝ糸の端、結ぶの／神も心して、
 早く夫に／返し縫ひ、差し込む積に胸／痛き、襟締め針の水に抜く、その
 仕付け、その白髪になる／まで物を思ひつゝ、あらかた支／度調へつゝ。
 ○さても次の日、瓶ぎ、は篠兎に／向かつて言ひけるやう「この度は／大事
 の門出、暇／乞ひやらお礼やら／に、これから親御／達の墓と／滝野川へ
 は／参るがよい。／早う行つて／おぢやれ」ト言へば、『もうお墓へは
 今朝／早く暇乞ひに／参りました。／嗚呼忘れる／ではなけれ／ども、何
 かに／紛れて／弁天へは／久しう／御無沙汰／致しました。／この行く末
 も祈念の為、／是非今日は参りませう。／帰りが暮れよう、どりや／今か
 ら』ト片時も／身を離さぬつぎへ

〔四ウー五オ〕

つゞきかの村雨／丸腰に差し、／「然様ならば」と／出で行きぬ。／これ
 より八幡の絵解き／この時真昼は疾く／過ぎたれば、滝野川へ／行き着く
 頃は既に／七つも回るなるべし。／弁財天の祠に／向かひ、懇ろに／伏し
 拝み、急ぎ／帰る田畔の細／道、予て／手筈を為し／たれば、時を計つて／
 出で会ふ●●非義六、／鯉次郎を／伴ひて、／濡すけに網／など担がせ
 たり。／『ヲ、篠兎か。滝野／川へ参つた／さうなが、今は／帰りか』
 『これは／伯父御様』青地氏も／御同道。／涼みがてらの／お殺生、
 ／夜中の雨で／水も濁る。／たんと獲れるで／ござりませう』／『慰みの
 ●●網打ちと見てくれては／引き合はぬ。斯う出掛けたも／我御寮が為。
 明日の／門出の立ち振る舞ひ、／酒の肴を買はせに／出したが、近所は
 勿論おとはの町／にも食はれさうな物は／無し。そこで俄の／思ひ付き、
 神宮川へ／出掛けたところ、先／生も遊びに来た／のを無理に此処まで／引
 つ張つた。其方も／最早用はあるまい。／さあ／一緒に／歩びやれ』ト手
 を／取られて否とも／言はれず。『そりや／興でござりませう』／『さア
 格別／／』ト／こゝ顔。『犬須賀／様が御一緒では、／また賑やかで
 ど太郎といふ／男を雇ひ、これに／竿、任せたり。』舟に乗らんとする／
 時に、「さア大変だ。／やイ濡すけ、破子や／酒は何とした。縁／端まで出



図版7 五ウ、六オ

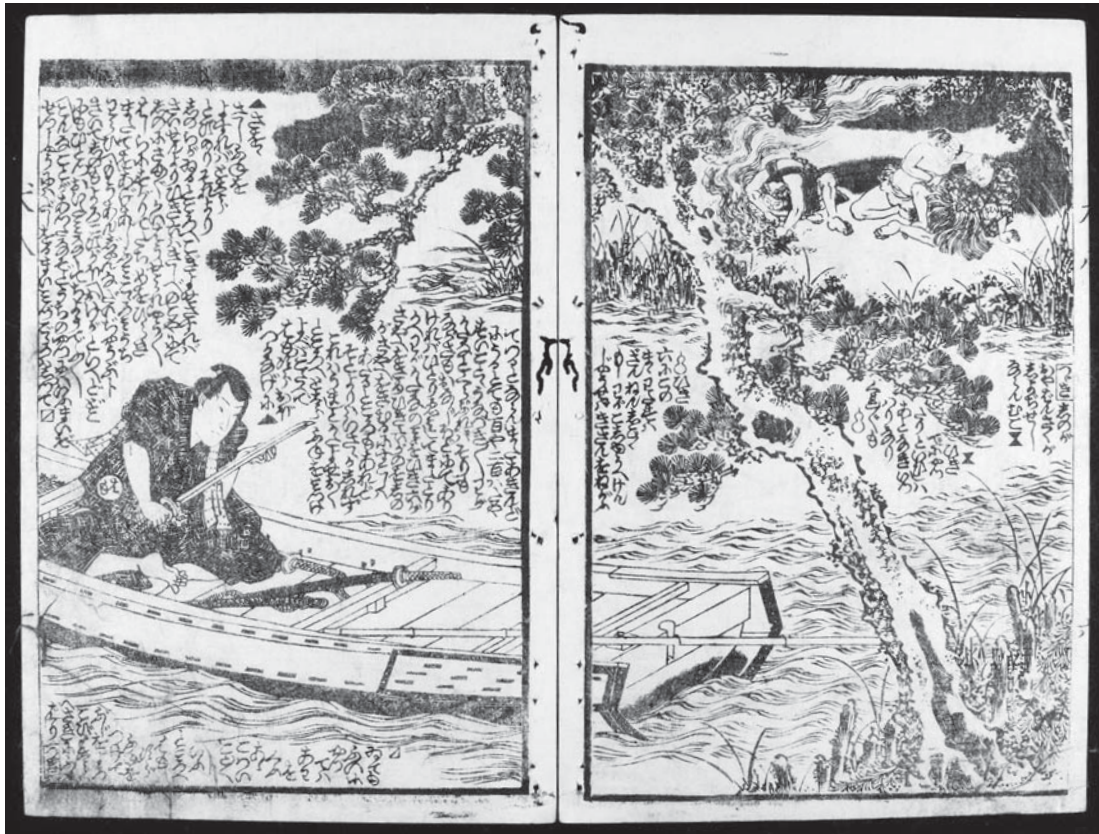
して置いたを、／ゑ、気の付かぬ大馬鹿者。／俺も念が足りなんだ／から遅くなるのは堪／忍する。韋駄天へでも／願掛けて、「飛びに／取つて来い」ト／苦り散らして／湍すけも帰し／それより舟を／漕ぎ出だし、／非義六／肌着／一つになり／腰蓑を／しかと纏ひ／網を／携へ／舳先／へ／出で、／打ち下ろし／引き揚ぐる／手に／従つて／つぎへ

〔五ウー六オ〕

つぎ 鯛、洲走り、／板子の上に／打ち上げられ、彼方／此方へ／跳ね回るを／取る手も／忙しく興／深し。日ははや／暮れて立ち／待ちの月の影は猶／上がらず。水の／面暗く／なれども年頃／手慣れし上手／の非義六、興に／乗じてまた／打ち下ろし、また／打ち下ろしする／ほどに、網諸／共に足踏み／外し、水煙／はつと立ちて真つ逆／様にぞ落ち入つたる。／態と落ちたることな／れど、皆／驚き／立ち騒ぐ。篠兎はその／ま、着物を脱ぎ捨て／続いて飛び入り、**二の巻へ**

二

一の巻より 掻き探る。もと／より水に慣れたる非義六、／暫く水の底を潜り、／右手に絡める網の緒／解き捨て、篠兎が飛び入る／時に及び、忽ちに／浮かみ出で溺れ苦しむ／様を為す。●／篠兎は／これを／救／はん／と／非義六が／手を取れば、波に／引かる、様をして篠兎が／腕へ絡み付きながら、／力に任せて深みへと／篠兎をひたすら引き入る、に、●と太郎元来／頼まれて非義六が／味方なれば、同じく水へ／飛び入つたれど上辺は／救ふ様にして篠兎に／取り付き沈めんとす。／篠兎は幼き時より／して水練水馬は妙を／得たり。力は樊噲、朝／比奈も物、数とも思はぬ若者。／「ゑ、もどかしや」トと太郎を一反あまり／蹴流して、見遣れば舟は遙かに隔、り／川下へ流れたれば、非義六を左手に／掻い込み、右手をのみ働かして対ひの／岸へ泳ぎ着き、上がればおめ／と太郎も這ひ上がつて諸共に／非義六が水を飲み弱りたる真似／したるをば、様／くに介抱なす。此方の／舟には鱧次郎、非義六と篠兎が刀、目釘を／打ち抜き柄を



図版 8 六ウ、七オ

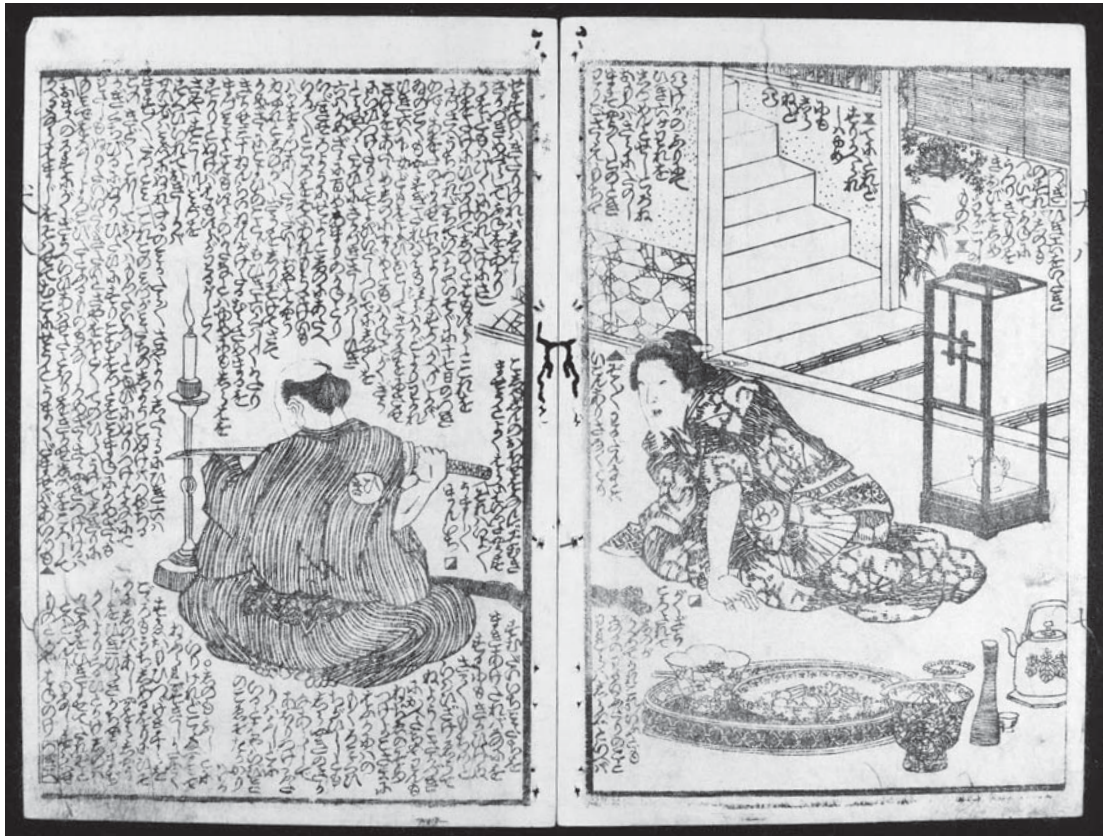
替へ、鞆を払へば村雨丸は●●はや切つ先より、滴る露、夏猶寒き刃の光。／「伝へ聞く鎌倉殿に、村雨丸と呼びし御太刀は、常に刃に水気を含み、殺気を起こして打ち振れば、雨の如くに露散る故、村雨丸と名付けらる」と聞しが、これこそそれならぬ。さらばやはり「つぎへ」

〔六ウー七オ〕

つぎ 篠兎が親、警作が所持せしならん。婿●●引き出に遣つたりと言ひしは、跡なきいつはりなり。くれぐれも●●非義六にこのま、渡すは残念至極。もし我が故主へ献上せば、帰参を願ふ」手蔓とならん。また商人に売るとても、百や二百はたや「すいと」、領きく、我が刀と比ぶれば、反りも長さも同じほどにありければ、一人笑みしてまた取り替へ、我が刀の身を非義六が鞆へ収め、非義六がのを篠兎が鞆へ収むるに、少しは当たる所もあれど、外よりは些か知れず。／「これは旨し」と片寄せ置く／ところへ、と太郎舟を見つけ呼べば答へて、鱧次郎、覚束なげに●●竿、差し、舟を寄すればと太郎飛び乗り、それより篠兎等が居る所へ漕ぎ寄せさすれば、最前より非義六は岸辺の小屋にて、篠兎に様ぐ介抱せられ、やう／＼柱に縋りて立ち、目を開き、また手を上げ足踏み試み打ち笑ひ、『もう案じやんな、大丈夫』ト聞いて篠兎も喜び顔、『お怪我といへど何処にも一つお痛みなくて重畳く』／「こんなことがあつたなぞと、家の奴には言ふまいぞ。殺生には出しをるまい。水心は知つて●●ゐても不意にやつては泡を食ふ。嗚呼、怖いことく」ト言ふ／ところへ、鱧次郎舟を着けて無事をよろこび、と太郎は船先に踏ん張り「つぎへ」

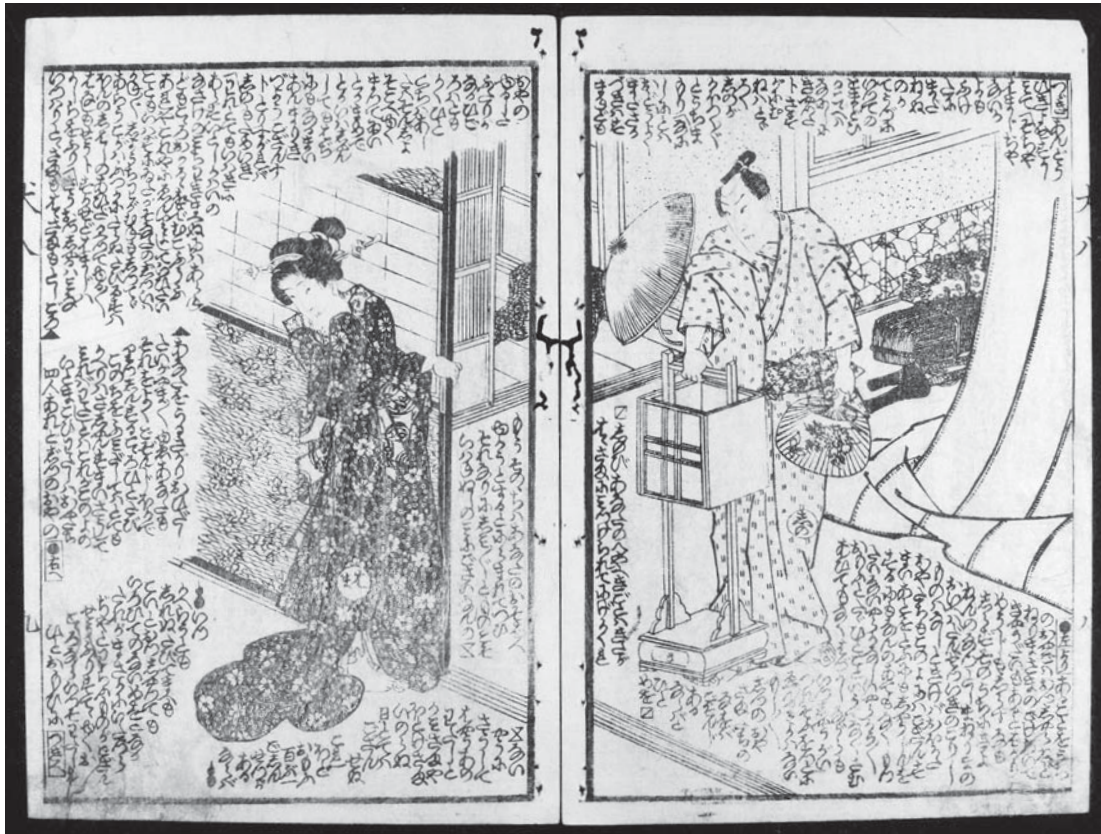
〔七ウー八オ〕

つぎ 非義六を抱き乗すれば篠兎も、続いて舟に移り、着物を着、帯を締め、我が腰の物は●●手に取れど、掬り替へられしは夢にも知らねど、●●怪我がふりにて、非義六が我を沈めんとせし心根、思へば、更に樂しみます。やう／＼この時、破子小筒持ちて「湍すけは



図版9 七ウ、八オ

来りければ、暫し／杯巡らして舟を上がり、／魚共は魚籠に入れ竹に刺し／青竹に引つ掛けて篠兎と鯉次郎とこれを／携へ、打ち連れ立ちて家路へ急ぐに、十七日の月／出で、青田の夜風心地よし。大須賀へ帰りしかば／亥の刻もや、過ぎたれば、鯉次郎は門より別れ／非義六は下女共を呼び起こして魚を煮させ、／酒を温め篠兎に勧め、供は予て岳藏／に言ひ付けたりとて呼び出だし、序でに酌を／取らせつ、互ひに杯差し交はし、非義六は瓶ぎ、に百目余りの金取り／出ださせ「路用にせよ」と篠兎に与へ、／色／と心を添へ、「あれもう時計も／八ッを打つ。明日が大事ぢや、早う／寝やれ」と篠兎、岳藏を退けて、さて／瓶ぎ、に今宵のことも非義六詳しく語り／聞かせ、「三十年來念がけたる村雨丸を／まづ見よ」と鯉次郎の刀とは夢にも白刃を／すかりと抜けば、鯉次郎が悪賢く、／鞘へ少し川水を／掬ひ入れて置きしかば、／刃は水に濡れたるのみか、たら／より滴るに、非義六は／ます／尊み、「これ、この水が御太刀の証拠。抜けば露散る／この奇特、零しておくは勿体なし」と指に塗り付け鼻にて／嗅ぎ、唇に塗り額に擦り込む。夫を見真似に瓶ぎ、も／私にも塗らたい、頂きたい」と鞘をほと／掌へ受けて頻りに／揉み手をなし、喜び例ふるものもなし。瓶ぎ、囁き告げけるは、／「お前の留守に岳藏へ言ひ合はせた通りを聞かせ、篠兎を殺して／帰るなら破魔兎を添はせて婚にせうと上手く騙せば彼奴も●」●ぞく／、若旦那とは／遺恨あり。さなくとも」御主人の仰せを何で背き／ませう」とよく腹へ入つた様子／「それはいよいよ／旨しく。／万一●」●／岳藏／殺されて／篠兎が／帰つてこれこれ言ふとも、／仲の悪い二人のこと。／我等は知らぬと言へば」済む。第一御太刀を／巻き上げたれば、何を／するにも気が引けぬ。／さア／もちつと／祝ひ酒、酔うて／寝よう」と杯／に替へた茶碗も／ねぢ絵の染め／付け、横様に／這ふ神宮の／目論見、食ひ／違ひしても／白焼きのさか／なあらしで／煽り付け、ふた／りは臥所に／入るとはや／軒／の聲ぞ高かり／ける。／○篠兎も臥所に／入りけれど心澄みて／眠られず、来し方行く／末思ひ続け、益荒男／心も打ち湿る。折に、密／かに忍び足、徐ら障／子を引き開き、蚊帳間ち／かく寄り来る人影。篠兎は／刀を引き寄せて「誰ぞ」と問へど返事もなし。「すは曲／者」と蚊帳跳ね除け、つぎへ



図版 10 八ウ、九オ

〔八ウー九オ〕

つゞき 行灯／引き寄せ透かし／見て『其方や／破魔児ぢや／ないか。／夜も／更け／たに／まだ／寝ぬ／のか。／手水に／行つての／戸惑ひ／か。此処へは／何しに／来遣つた』／トさす／がにむ／ねはとゞ／ろく。／篠兎が／顔、熱く／と打ちま／もり、『何／しにとは／お胴欲。／まださか／づきは濟／まねども』親の／許した／二人が／仲。日／ごゝろはとも／かく一／口は、あし／たはそんなじよ／其処へ行く、／待つて居い／とか忠実で／とか、言はしやん／しても恥／にもなるまい。／あんまり氣／強うござんす』ト取り縋れば／篠兎も溜息、／『我／とても岩木に／あらず。愛し可愛いの／情けの道、弁／へぬにはあらね／ども、心置かる、伯母婿夫婦、／あれやこれやに遠慮して言ひたい／ことも言はずにゐるが、其方の実意は／かね／承知。我が胸も知つて、／あらう。許我は二日に足らぬ旅。留守は／ほんの暫しの間、帰つてゆる／く／話もせう』ト賺せど破魔児は／頭を振り、『さう／仰るは皆／偽り。父様も母様も年頃●／貴男を煩がり、追ひ出し／たいが山／故、貴男も／それをよく御存知。外で／立身する心。一度／この地を踏み出しては、とても／帰りはさしやんすまい。さうして／見れば私／とはこれが此の世の／暇乞ひ。私／は親達／四人あれど、実の親の ●右へ』●左よりあることを内／の親御は仰らねど、／煉馬様の御家来で／兄弟も在るとばかり、／名字も知らず名も／知らず。その内に去／年の夏、としま、煉馬の／御家は断絶。生き残りし／者は無しと聞けば、大方／親達も此の世にはござんすまい。跡を問ふにも精進を／するにも何の当てもなく、勿／体ないやら悲しいやら。斯う／く／思ふとたゞ一言言うて慰む／相手も無く、恥づかしながらも／一生涯／連れ添ふ夫に遠慮はない。／もし／／実の親／様達の／名をば／御存知／ある／ならばと、／人／目を ●忍び貴男の部屋へ来ごとは来たが／母様に見付けられて逃げ隠れ』もうその後は貴男のお側へ／行かうとすると睨まれて、つひ／それなりにしみる／と物こそ／言はね、主の身に御災難の ● ● ない／やうに、／さうして／早うあの／私と、／神様や／仏様／祈らぬ／日とは／ござん／せぬ。／これ／ほど／思ふ／百分一／御親／切が／ある／ならば、 ● ● 何時／帰らうとも／知れぬ旅、手前も／来いと／仰つても／弄

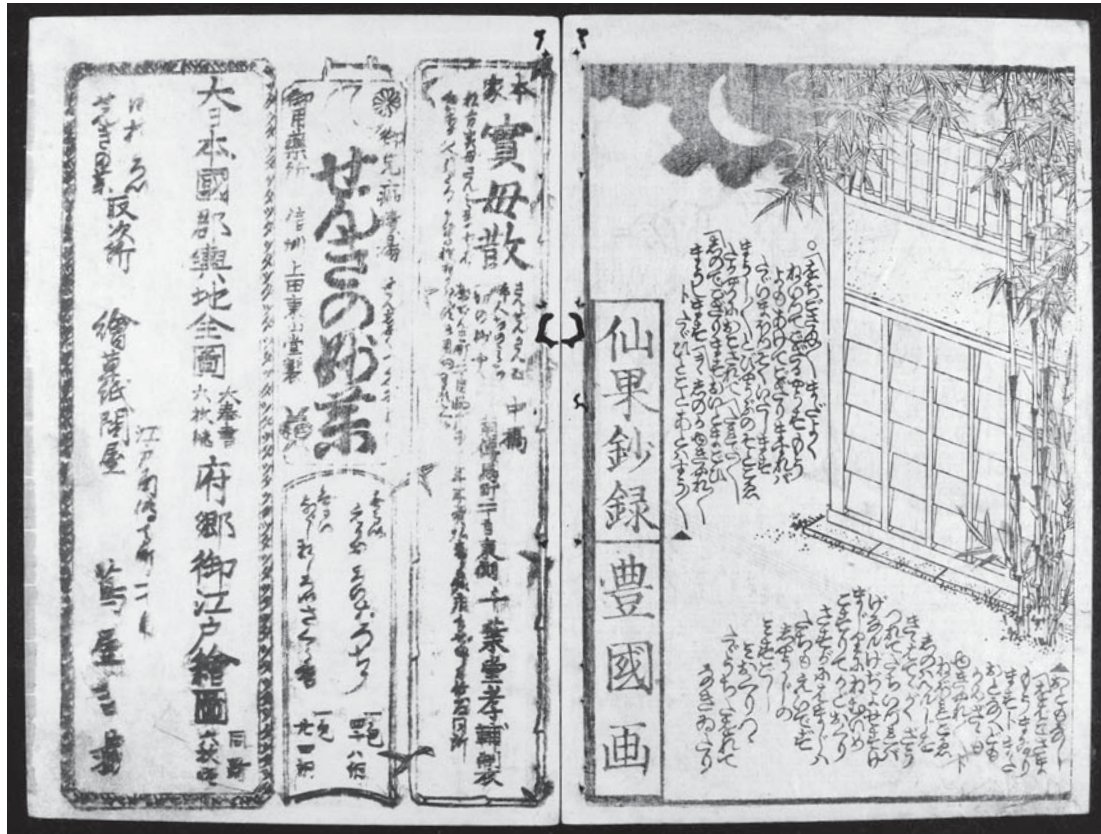


図版 11 九ウ、十オ

ひ手の無い女夫仲、誰がまさか悪戯／ぢやと笑ふ者がござんせう。振り捨て、行くお／心なら、いつそ私を／一思ひに **つきへ**

〔九ウー十オ〕

つぎ 殺しておいて行かしゃんせ」ト搔き口説かれて／『嗚呼、これ／＼、声が高い。静かに／＼。恨みの／段々／無理ではなけれど、今度の旅も伯母／夫婦の指図で実是我等を追ひ出し、そなたに婿を取る心』『さ、それではいよいよ此処に／居ては』『さア操、破るも親への孝行。今連れ／出しては二人が実を察してくれる者は／なく、色に迷ひし悪戯と二人を／人の様には言ふまじ。心さへ変はらぬ／なら、また一つになる時があらう。親達の見付けぬ間に、早う帰りや』ト手を取れば、『見付けられても／怖くない。腹散々申します。／一緒に去んで下さんせうは／殺してやいの』ト身めより口はきか／せぬ。あまりと言へば聞、分けなし。／死ぬばかりが人の実か。立身／出世の門出の妨げ。言ふこと／聞かねば女房でない』ト腹立ち／顔して涙を隠し、小聲／ながらに罵れば、破魔児は「わつ」と泣き／出だし、噎んで暫し言葉もなし。／『優しい言葉を一度も聞かず、／別れの際に叱られて邪見な／御方と思ふにも、やつぱり私は／御前が眞眞。大事で／＼なりませぬ。／その御方のお為にならぬと言は／しやんすりや是非がない。もう／＼』思ひ切りました。随分ともに／御道中夏病みもせぬやうに、／彼方でもお達者にお暮らし／なされて下さんせ。死ぬばかりが／親切ではござんすまいが、／別れて居て如何して命が／ござんせう。無理には死なねど／思ひ死に。その時は彼の世／まで変はらぬ夫婦でござん／すぞへ。心を変へて下さん／すな』ト口は立派に／涙は滝つ瀬。篠兎も／不便さ胸いつぱい、／物をも言はず／領き居たり。／『もう鶏が歌ひ／ます。御目覚まされて／御支度を』ト障子の外に／岳藏が●●呼び／起せば、／『もうさうかの。／どりや起きま／せう』ト言ふ声に／岳藏は勝手へ行き、朝餉の／用意にか／りけり。／『いざこの隙に』ト押し／出だせど立ち上がるべき力も／なく、泣き腫らしたる目に見れば／掻き立つる火も薄暗き恋の／闇路を辿りつ、破魔児は／臥所へ泣きつ、行きぬ。



図版 12 十ウ、原裏表紙見返し

〔十ウ〕

○『伯父御様』。まだよく寝入つてござる様子。もう夜も明けてござりますれば、只今発足致します。申しくと屏風の外、声高やかに起こされて『誰だ』、『篠兎でござります。お暇乞ひ申します』『ヲ、篠兎か。行き遣れ』ト一言、後はすうく●音も無し。『伯母御様、もう参ります』トまた訪へども、瓶さ、も『行き遣れ』ト寝惚れ声。篠兎は返事を聞、果て、岳藏、連れて立ち出づれば、下男下女、湍すけ、混じりに眠い目、擦りて門送り。流石に破魔兎は立ちもえ出でず、障子の御簾越し見送りつ、た、打ち倒れて泣き居たり。

仙果鈔録 豊國画

〔原裏表紙見返し〕

家本 實母散 さんぜんさんご／婦人ちのみち／一切の妙やく

中橋／南傳馬町一丁目東側 千葉堂孝輔製

私方実母さんの義 中ばし南でんま町一丁目西がはにて 年來賣弘来り候処

店手せまに付 此度同所／向東がはへ引うつり申候間 猶相かはらす御用向

奉願上候

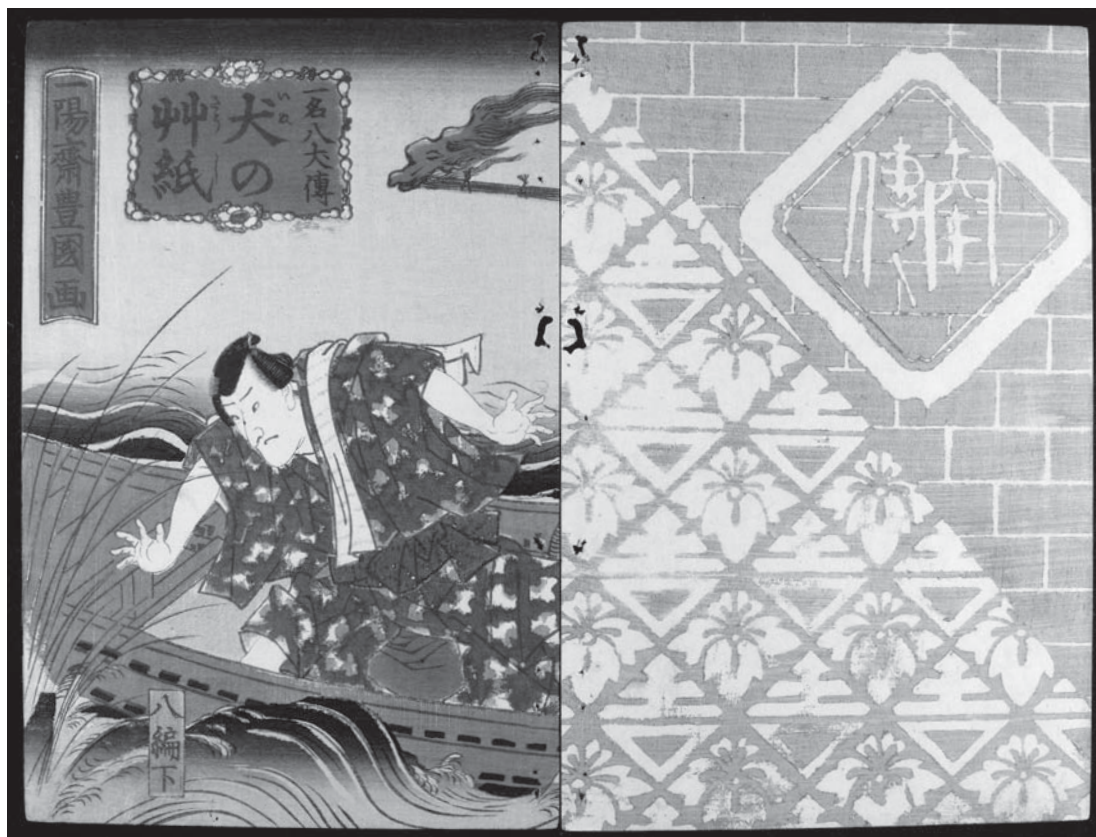
御免疝積湯 せんしやくつかへによし

せんきの妙薬

御用薬所 信州上田東山堂製

無い／えりおしろいはつちり 一包／四十八銅
無い／ながしおしろいさくら香 一包／廿四銅

大日本國郡輿地全圖 六枚巻 府郷御江戸繪圖 六枚巻
御おしろい 取次所 繪草紙問屋 江戸南傳馬町一丁目 鳶屋吉藏



図版 13 八編上原裏表紙 (色刷)、八編下原表紙 (色刷)

登場人物一覧 (八編上)

次に『雪梅芳譚犬の草紙』八編上の登場人物名(その他)をかかげ(読み仮名・漢字とも表記は原文のまま)、その下の【】に、相当する『南総里見八犬伝』の登場人物等の名を示す。

犬須賀篠見成孝【犬塚信乃成孝】

犬須賀磐作一成【大塚番作一成】の子。磐作の死後、伯母瓶ざ、と伯母

婿非義六夫婦に養われる。亡父から託された亡君持氏【足利持氏】の宝

刀村雨丸【村雨】を、非義六の刀とすり替えられたことに気づかないま

ま、成氏に献上するために許我【許我】へと旅立った。

瓶ざ、【龜篠】

篠見の父磐作の異腹の姉で、非義六を婿に迎えた。青地鱧二郎が破魔児に横恋慕していたことに付け込み、鱧二郎を破魔児の婿にする代わりにと、篠見から村雨丸を奪う策略に引き込む。

青地鱧二郎【網乾左母二郎】

大須賀村に住む浪人。瓶ざ、に、破魔児の婿にする代わりに村雨丸を非義六の刀とすり替えるように唆され、これに協力するが、非義六の手に渡すのが惜しくなり、非義六の刀とすり替えた村雨丸を、更に自分の刀とすり替えて、村雨丸を自分の物とした。

大須賀非義六【大塚墓六】

大須賀村【大塚村】の村長。瓶ざ、の入り婿。磐作の死後、篠見を引き取り養育していた。ひがみ虻六と破魔児との縁談が持ち上がったことを機に、篠見から村雨丸を奪おうと画策。篠見を神宮川【神宮河】での漁に誘い、わざと舟から川に落ちて溺れたふりをしながら、鱧二郎が村雨丸と非義六の刀をすり替える時間を稼いだ。しかし、鱧二郎に本物の村雨丸を掠め取られたことを知らない。

成氏【成氏】

持氏の末子。春王【春王】、安王【安王】、兄弟の弟。あふぎがやつ

【扇谷】、山のうち【山内】、両管領と争うが、享徳四年下総許我熊浦

【熊浦】へと逃れた。しかし文明四年山のうちのあきさだ【山内顯定】

に攻められ、千葉むつのかみやすたね【千葉陸奥守康胤】の元へ身を寄

せた後、文明九年両管領と和睦し許我に戻った。会話にのみ登場。

ひがみ虬六【簸上宮六】

大石ひやうゑのじよう【大石兵衛尉】の陣代。ひがみじや太夫【ひがみ

蛇太夫】の子。父の死後跡を継ぎ、巡見した先の非義六の家で破魔児に

一目惚れをする。名前のみ登場。

岳藏【額藏】

非義六の下男。篠兎と兄弟の義を結ぶが、非義六夫婦を欺くため仲の悪

いふりをしている。非義六夫婦が密かに虬六と破魔児との結納を交わし

ているのを目撃し、それを篠兎に伝えた。

破魔児【濱路】

非義六、瓶ざ、夫婦の養女。許婚の篠兎が許我へ旅立つ日の前夜、密か

に篠兎の部屋を訪れ、自分も連れて行くように懇願するが拒絶される。

湍すけ【背介】

非義六の老僕。

ど太郎【土太郎】

非義六らが神宮川で漁をする際に雇った舟の船頭。予め非義六に頼まれ

ていた通り、溺れたふりをする非義六を助けようとした篠兎の邪魔をし

て、時間を稼いだ。

寂寞道人肩柳【寂寞道人肩柳】

挿絵にのみ登場。